

TOPICS 今号のトピックス

- 日本テレビ報道番組「NEWS ZERO」写真展&公開セミナー実施
- 公開セミナー 第32回名作の舞台裏「鈴木先生」
- 4～8月企画展開催報告&夏休み 各種の体験教室を実施
- 放送番組収集基準を一部改定、5月に理事会 6月に定時評議員会を開催

■日本テレビ報道番組『NEWS ZERO』写真展&公開セミナー実施

■「ZERO写真展2012 YOKOHAMA」を開催 (6/1～7/16)

2006年10月にスタートした日本テレビの報道番組『NEWS ZERO』の写真展を開催。『NEWS ZERO』は、ニッポンの23時台に新しい風を吹かせたいという思いのもと、未来を紡ぐ若者に向け、時代の“今”を伝えるために、これまでのニュース番組の枠に縛られず、常に新しい話題を伝え続けている。そうした番組作りで共感した写真家・大村克巳氏がZEROの舞台裏



を密着し続けた写真510点を展示。展示された写真には、ZEROのキャスター陣を始め、国内外のアーティスト、スポーツ選手、政治家などの

出演直前の姿、取材の合間に見せる和らいだ様子など、写真ならではの一瞬の表情が切り取られている。また、昨年の東日本大震災に、ZEROがどう向き合い、どう伝えたのか？が写真を通じて伝えられた。会場には、20～30代の女性を中心に、日本全国から多くの来場者が訪れ、「テレビで見ている世界の裏側を別の角度から見られて心に残った」「一瞬を切り取る写真の力を感じた」「復興に対する思いが写真を通じて感じられた。今後も被災地の姿を追いかけて欲しい」など多くのメッセージが寄せられた。

■公開セミナー 制作者に聞く!～番組制作の現場から～『NEWS ZERO』を開催 (7/7)

「ZERO写真展」の関連イベントとして公開セミナーを実施。番組スタッフと写真家・大村克巳氏が、ZEROが伝えてきたもの、番組作りへの思い、6年目を迎えたZEROのこれからなどを、映像・スライドを交えながら語った。若い世代の視聴者層の心を掴んでいるZEROならではの歯切れの良いトークで、放送の裏側・現場の様子が楽しく分かりやすく伝えられた。200名の参加者からは「制作者の思いがわかり有意義な時間が過ごせた」「これからも若い世代に向けた報道を続けて欲しい」など多くの感想が寄せられた。

[登壇者] 山崎 大介 (NEWS ZEROプロデューサー)

大村 克巳 (写真家)

ホラン 千秋 (NEWS ZEROキャスター)

[司会] 八木 早希 (NEWS ZEROキャスター)



ZEROの原点、存在意義

番組立ち上げからプロデューサーを務めている山崎氏は、番組の存在意義を常に確認している。『NEWS ZERO』を作ろうと思った時に「報道の原点に立ち返ろうと思った」という。「52年続いた『きょうの出来事』の後番組。これを変えるのは日本テレビにとっても大きなジャッジだった。その中で新しく生まれた番組が、いきなり緑色の番組で、村尾信尚さんの司会で、嵐の櫻井翔さんや小林麻央さんが出ている。皆さんびっくりされたと思う。でも、そこには僕らの思いが凄くあった。ニュース番組は、これからの日本や世界を背負っていく若い人がなかなか見ない。僕は当時35歳だった。若い人が見るニュース番組は今までの常識を覆さないと出来



ないだろうと思う、どうすれば若い人が見るのだろうという事をずっと考えて作ってきた。『NEWS ZERO』を立ち上げた時の企画書の最初に「日本を良くする事に貢献したい」と書いてある。今見ると凄く青臭いなと思うが、ずっとその気持ちは変わっていない。若い人達に知って貰う、考えて貰うきっかけを提供し続けられるという事が、僕らが思っている日本を良くする事に貢献する事だと。なので、ホランさんや八木さんのような若くて才能ある方々やZEROの仲間に力を貸して貰い、若い人に問題意識を持って貰えるようなニュース番組を提供したいという思いを日々確認しながら続けている」

反省会、伝えることの責任感

会場に大村氏が撮影したZEROの反省会の写真が映し出された。番組終了後の反省会は欠かせない。時に反省会は熱い議論を闘わせる場ともなる。大村氏は反省会を撮影した時に「それだけ伝えるという事に対するの責任を持っているのだ」と感じたという。八木キャスターも「インターネットでは細かい情報を拾える

というメリットはあるが、匿名性という所で荒れてしまう部分がある。報道番組というのは、自分の名前を出す責任感、番組の名前を背負っているという覚悟が違うと思う」と加えた。また、ホランキャスターも村尾キャスターから「日本全国の人に見てもらふ事だから、自分が



大村 克巳



ホラン 千秋

喋ることに責任を持ちたいし持たなきゃいけない」という、報道の覚悟や使命感を聞き、「ZEROが何を伝えたいのか、何を大切に伝えたいのかという事を考えながら、私の目

が視聴者の皆さんの目なのだと思って伝えるように心がけている」と語った。大村氏が撮影した、様々なゲストやZEROのキャスターの写真が次々にスクリーンに映し出され、その時々エピソードが披露された。また、大村氏はZEROのスタッフを撮影して「キャスターの

皆さんは、他に本業があり忙しいなか、それぞれの取材に対して、ここまで真剣になれるのだという姿をいつも見せて貰い、勉強になるし、感動します」と語った。

ZEROと東日本大震災

ZEROのキャスター皆で訪れた2011年5月の宮城県石巻市北上

中学校の植樹の写真を見ながら、震災に対してのZEROの思いが語られた。山崎氏「3・11以降、それぞれが自分の無力感とか存在を考えて報道していた。全員で同じ瞬間に被災地に足を踏み入れるという事は、他のニュース番組でもなかなかないと思うが、この植樹がきっかけで、全員で被災地を見て、震災の放送をずっと続けていきたいという事を確認した日だった」、八木キャスター「北上中学校の皆と植えました。辛い思いをした子どもたちが本当に気丈にっていて、将来この子どもたちがいればきっと大丈夫だと思いました」、ホランキャスター「私も先日被災地に行き、ものすごい衝撃だったのを覚えています。山崎さんに、テレビのことは気にしないでいいから、しっかり目に焼きつけておきな、と言われました」とそれぞれの思いを語った。



八木 早希

これからのZERO

最後に山崎氏が次のように締めくくった。「今年の植樹でまた被災地に行きました。＜放送＞とは、送りっ放しという字に読める。僕らはどうしても送りっ放しにしがちになるし、次から次へと新しいニュースが飛び込むと、前のことは無かった事のようにしてしまう。そういう自戒の念も含めて一つの事をこだわり続けてやり続けるというの、ZEROの精神なのかなと思っています」

■公開セミナー 第32回名作の舞台裏『鈴木先生』



4月21日、番組制作スタッフや出演者が自らの番組を振り返る人気公開セミナー「名作の舞台裏」が開催された。今回は、2011年4～6月にテレビ東京で放送され、これまでにない全く新しい学園ドラマとして話題になった『鈴木先生』を取り上げ、243名が参加した。

[登壇者] 長谷川博己(出演) 河合 勇人(演出)
古沢 良太(脚本) 山鹿 達也(制作)

[司会] 石橋 冠(放送人の会)

独特な原作をドラマ化

平成13年に開始した「名作の舞台裏」シリーズだが、テレビ東京のドラマは初めて。また、応募者数2087名はシリーズ史上5

番目の多さで、改めてこの番組の人気ぶりが伺えた。

原作は、2007年文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞を受賞した、武富健治による青年誌掲載のコミック。どこにでもいそうな平凡な教師“鈴木先生”が、どこにでも起こり得る問題について過剰に悩みつつ、独自の教育理論によって解決していく様を描いている。企画の意図について、河合が「給食、掃除当番など、今までの学園ドラマでは取り上げられなかった“普通の子供たちの些細な問題”に触れ、かつ答えを出さないという原作に魅入られた。原作は圧倒的な文字量で過剰に引っ張っていく表現方法をとっている。これを映像化するのは難しいだろうと思いつつ、でももしできたなら、きっと新しい学園ドラマになるだろうという予感があった」と説明。古沢も、「漫画は分からない部分をもう一度読み返せるが、ドラマは時間と共にどんどん過ぎていってしまう。視聴者がどれくらい理解できるか、本当に受け入れられるのか分からずに書いていた」と振り返る。



山鹿 達也

オンエアの月曜22時は、テレビ東京では10年ぶりに復活したドラマ枠で「他局でやらない、エッジの効いた社会派エンタテイメント」というのがコンセプト。山鹿は「原作のきわどい性的な描写も、テレビだからできないとは言わず、色々なことを“エンタテイメント”に含めてやっつけてしまおうと考えた」と語った。

主演を演じた長谷川は、このドラマが初主演作。「原作の絵のタッチを見た時に、メガネをかけた自分でもこの雰囲気は出せると思った」と言い、オーディションもメガネをかけて臨んだ。「会った瞬間、あ、鈴木先生が来たと思った。その場に居た人間が皆そう思ったくらい、ピタリとハマっていた」と河合。鈴木先生のトレードマークとも言えるループタイは、河合と長谷川の二人で役に合うものを探しに行ったという。



生徒役もすべてオーディションで決定した。素で演じているようで、実はかなり念入りなりハーサルを重ねていたとのこと。演技指導もかなり厳しく、長谷川は「自分が他の場所でロケをやっている間に、子供達は教室のシーンで完璧なりハーサルをしている。そこへ入っていくのは大変なプレッシャーだった」と振り返る。また「教師というのは何を言うにも責任のある仕事。膨大な量のセリフを、自分の腹の底から言えるのかという不安があった」と明かした。

新しい表現手法



独特の表現手法も目を引いた。とかく「分かりやすさ」を求められるテレビドラマで、画面は暗く、画質も荒めに撮影されている。河合は「自分の中学校の教室がああいう暗いイメージ。生徒たちのディベートのシーンに緊張感とリアリティを与えるためにも、本物の中学校の教室を表現したかった」とその理由を語った。また、セリフに沿って画面に文字が次々と出てくる演出方法も斬新だったが、「漫画ならではの過剰な表現をドラマのセリフで表すために、瞬時のうちに言葉を次々飛び出させる方法を取った。中学生には難しい言葉もあえて噛み砕かず、原作のとおり使った」と古沢。河合は「原作の圧倒的な文字量を、映像でどう表現するか考えた。普通なら、画面に文字を出すというのは邪道な演出だが、画だけでは足りないのではないかという恐怖感があったし、古沢さんの書いた過剰なセリフを現場で削りたくなかった」と語る。「過剰な台本を元に、照明、美術など他のパートがどんどん上乘せしていく、足し算のドラマだった。引き算という考えは無かった。原作の過剰さをどう表現するかと考えると、そうならざるを得なかった」とも。石橋は「難解な言葉、次々とスーパーインポーズされる文字、鈴木先生の目をクローズアップしてのモノロークなど、どれもドラマ表現の新しい文体だ」と評した。

斬新な教師像

かつての学園ドラマとして名高い『熱中時代』『金八先生』などでは教師はヒーローとして描かれ、教師の情熱が生徒を変えていくというパターンが主だった。しかし「情熱・熱血を出さない、単純な不良やヤンキーを出さないということを最初に決めていた」

と河合。熱血漢の教師が奮闘して事件を解決するのではなく、鈴木先生はひたすら悩んでおり、同僚の教師たちも人間臭い面が多々描かれる。長谷川は「家に帰って生徒の妄想をしているところなど、見せなくてもいい部分。とはいえ教師のそういう部分を演じられたのは幸せだった」と語る。「普通は、学園ドラマを見て“あの頃は良かった”と思うものだが、学校生活のイヤな部分や思い出したくない部分を思い起こさせてくれるドラマ。これは今までの学園ドラマでは描かれてこなかった部分」と古沢。大袈裟すぎるほどに悩む鈴木先生の姿も、長谷川は「普通に悩んでいたら面白くない。地球が終わるかのような大きなスケールで悩みたいと思っていたし、そっちの方が見ていて面白かったのでは」と演技の裏側を語った。

「視聴率」と「名作」の関係



意欲的な作品であった一方で、その視聴率も話題になった。平均視聴率は何と2.16%（最低は1.6%）。ドラマとしては致命的な数字と言える。長谷川は「自分は演劇出身なので、テレビの世界に入って初めて、視聴率というものにこんなに影響されるのだと知った。とはいえ、初回放送後に数字を聞いた時は、今後もう自分に仕事は来ないんだと思った」と笑う。古沢も、「そもそも高視聴率は取れないとは思っていたが、予想を上回る低さだった。普通はオンエアの翌日にプロデューサーから視聴率を知らせる電話がかかってくるのだが3日経っても連絡が来ず、自分でネット検索して知った」と明かす。過激な内容だった第1話目は抗議の電話が殺到することを想定し、テレビ東京では「中学生の性行動を助長するものではない」という苦情対応のマニュアルまで揃えていたのに、来た電話は「ネコを殺すとは何事だ」という1本だけだったという。

その一方で、熱狂的なファン層にがっかりと支えられていたことも事実。ギャラクシー賞優秀賞や日本民間放送連盟賞テレビドラマ番組部門最優秀を受賞するなど、高い評価も受けた。石橋は「“あんなに数字が低くても良くやっている。面白いから見てみる”と業界でも話題になっていた。去年は地震のせいでテレビも混迷に陥っていたし、視聴者もゆっくりドラマを見る心境ではなかったのでは」と分析する。

参加者からも、「このドラマには的確な答えはなく、見た人それぞれの解答がある。頭を使い疲れるが、こういった作品はなかなかない」「息子が中学生になったらぜひ見せたい。鈴木先生の言葉は、親にも子にもバイブルになりそうだ」といった熱い感想が寄せられ、“視聴率”と“名作”の関係性を深く考えさせるセミナーとなった。

セミナー当日は、折しも放送ライブラリー展示フロアで「春の人気番組展」を開催中で、映画版「鈴木先生」で使われた小道具を展示していた。鈴木先生が着用したループタイや衣装、クラスの出席簿などに、参加者は興味深そうに見入っていた。

■4～8月企画展開催報告

4月には、各放送局の協力を得て、恒例の「春の人気番組展」(4/13～5/20)、続く6月からは前述した「ZERO写真展2012 YOKOHAMA」(6/1～7/16)を開催。夏休みには、ロンドンオリンピック開催記念として「オリンピックを学ぼう!展」を開催した(7/21～9/2)。オリンピックとテレビの関わり(スポーツ放送史)、オリンピックの歴史(公式ポスター、聖火トーチ、歴代マスコット、東京オリンピックの表彰台)の展示紹介のほか、ロンドンオリンピック



コーナーでは、日本選手団オフィシャルスポーツウェアの展示、オリンピックで行われた26競技の詳しい紹介、各競技の代表ユニフォーム、競技用具の展示など、さまざまな角度からオリンピックを取り上げた。会場には、夏休みの親子連れを始め、夏休みの課題がオリンピックという中・高校生、東京オリンピックに思い出を持つ年配の方など、多くの方が来場した。「タイムリーな企画で楽しかった」「オリンピックの知識を学べ、オリンピックを見るのがさらに楽しくなった」「普段見られない競技用具を見たり触れたり出来て楽しかった」など多くの感想が寄せられた。(写真は「オリンピックなるほどクイズ」に挑戦している子供たち。)現在は「tvk40周年・その足跡と明日への歩み展」を開催中(9/7～10/8)。

■夏休み 各種の体験教室を実施

放送各社の協力および諸団体の助成を受け、小中学生向けの各種体験教室を以下のとおり実施した。

- 1) **出前授業@テレ朝**(7/25)小4～中3年生と保護者を対象に、テレビ朝日のドラマ制作者からドラマ作りの裏側や演出の方法について話を聞いた。(参加者54名)
- 2) **日テレ体験教室**(7/29-2回開催)小4～6年生と保護者を対象に、日本テレビ技術統括局のスタッフが技術面から番組作りについて話し、機械に触れる体験をした。(参加者141名)
- 3) **アナウンサー体験教室**(7/31, 8/21 講師社:フジテレビ・NHK-4回開催)小4～中3年生を対象に、アナウンサーの仕事について話を聞き、発声練習やニュース原稿読み体験を行った。(参加者67名)
- 4) **ラジオ・DJ体験教室**(8/14 講師社:FMヨコハマ-2回開催)小4～中3年生を対象に、ラジオの生中継見学や効果音作り、番組作り体験などを行った。(参加者33名)



※1,2は放送文化基金、3,4は子どもゆめ基金助成事業

■放送番組収集基準を一部改定

放送番組センターは5月10日開催の放送番組収集諮問委員会に放送番組収集基準の改定案を諮問、同案について妥当であるとの諮問委員会答申を得、同月31日開催の第1回理事会で答申通り改定した。放送番組収集基準の改定内容は次の通り。
1. 保存番組は公開が前提であることを明確にするため、テレビとラジオの各収集基準第7号と9号に「公開」を追加した。2. 一般社団法人脚本アーカイブズ推進コンソーシアムに当センター保存の台本も移管予定であるので、「註」に保存番組に付随する資料として例示の「番組台本など」を削除した。3. 「コマーシャル」の表記を「CM」に改めた。以下は同基準(前文省略)。

下記の基準に該当する日本放送協会、一般放送事業者、放送大学学園のテレビ、ラジオ番組で、番組保存委員会が選定したもの。

1. テレビ番組
 1. 国内および海外の賞を受けた番組
 2. 高視聴率、視聴者の反響など話題を集めた番組
 3. 表現技法、制作技術などにおいて新しいジャンルを開拓した番組
 4. 現代史、社会風俗、人物などの記録として価値のある番組
 5. 芸術、科学、伝統文化などの記録として価値のある番組
 6. 長期間継続して放送された番組
 7. 各社が当センターにおける保存・公開を希望した番組
 8. その他、放送史の記録として適当と認められる番組

一註一

 - ① ニュースおよびその関連番組は、収集基準の4,8に該当するものを収集対象とする。
 - ② 保存番組に付随する資料も収集対象とする。
 - ③ 劇場用映画および外国制作番組は、原則として、収集の対象外とする。
2. ラジオ番組
 1. 国内および海外の賞を受けた番組
 2. 聴取者の反響、評価などにおいて話題を集めた番組
 3. 表現技法、制作技術などにおいて新しいジャンルを開拓した番組
 4. 現代史、社会風俗、人物などの記録として価値のある番組
 5. 芸術、科学、伝統文化などの記録として価値のある番組
 6. 音楽の記録として価値のある番組
 7. 話し言葉、話術、話芸などの記録として価値のある番組
 8. 長期間継続して放送された番組
 9. 各社が当センターにおける保存・公開を希望した番組
 10. その他、放送史の記録として適当と認められる番組

一註一

 - ① ニュースおよびその関連番組は、収集基準の4,10に該当するものを収集対象とする。
 - ② 保存番組に付随する資料も収集対象とする。
3. CM

下記の基準に該当する一般放送事業者が放送したラジオ、テレビのCMで番組保存委員会が選定したもの。

 1. 国内および海外の賞を受けたCM
 2. 優れた広告表現のCM
 3. 広告対象、キャラクターなどにおいて話題となったCM
 4. 時代の風俗、流行などに影響を与えたCM
 5. 社会事象、世相などを反映しているCM
 6. 放送史あるいは広告史の記録として適当と認められるCM

■5月に理事会、6月に定時評議員会を開催

5月に第1回事業運営委員会と理事会を開催し、平成23年度事業及び決算報告等を了承した。6月に公益財団法人へ移行後、初の定時評議員会を開催、東京大学総長の濱田純一評議員を評議員長に、君和田正夫理事の後任にテレビ朝日専務取締役の北澤晴樹氏を選任した。また平成23年度事業と収支決算及び予算更正をそれぞれ承認した。

・7月に放送ライブラリー展示ホールの常設展示4コーナーを改修、「プレイバックシアター」等をリニューアル、「放送のしくみ」「フューチャーTV」の新コーナーを開設した(リニューアルの内容は次号に紹介する予定)。

・また当センターでは、早稲田大学ジャーナリズム教育研究所と共同で「放送番組で読み解く社会的記憶 ジャーナリズム・リテラシー教育への活用」を6月に刊行した。